

編集後記

われわれの透析医療は医療保険の改定や介護保険の発足を来年に控え、現在、非常に重要な時期にあると云えます。この時に当たって、本号ではまず、医療保険の問題をとりあげました。すなわち、平澤由平会長と高橋 進教授にそれぞれ透析診療報酬の変遷や DRG/PPS をとり上げていただきました。これらはいずれも立派な論文で、是非熟読していただきたい内容です。また、前田憲志教授には透析医療の歴史と今後の問題をとりあげ、今後の透析医療はいかにあるべきかを述べていただきました。この論文も多く示唆に富む優れた内容のものであります。

透析医療費については、透析医会で一昨年と昨年の2回にわたって実態調査を行いました。吉田豊彦先生らにより結果がまとめられ、掲載されています。医療費の現状を踏まえ、今後の透析保険制度のあるべき姿を示唆しております。多くの表と数字で示されておりますが、これらをよく見ていただき、意味することを検討して下さるようお願いいたします。

災害関係では兵庫県から2編、大分県から1編の論文が掲載されています。それぞれ、過去の経験からの反省、あるいは今後のあり方を具体的に提言しているものであり、会員にとって重要な内容です。

良質の透析医療を行うためには、臨床・基礎の研究が必須です。今回、優れた治療法の一つとして注目されている HDF について、昨年11月15日の透析医会シンポジウムでの発表内容を、8編の論文として掘り下げていただきました。また、検査関係では腎不全での画像診断の進め方をわかりやすく述べていただきました。いずれも診療に直ちに役立つものです。基礎的研究としては、アミロイドーシスと HLA や、CAPD での腹膜機能に関する論文がとりあげられています。これらは学問的に重要であるだけでなく、長期透析患者の QOL 向上のために是非解明されなければならない問題です。

支部だよりでは、青森県と香川県からそれぞれの奮闘ぶりの報告がありました。

このように本号も多方面にわたって優れた論文が多く掲載され、充実した内容となりました。立派な論文を寄稿された先生方には心からお礼を申し上げます。

間もなく透析医会の総会が開催されますが、そこでは多くのことが検討され、計画されることでしょう。本誌が透析医会の一層の発展のために少しでも役立つものであるように願ってやみません。

(広報委員会副委員長 飯田喜俊)